

つたと云つては哀しみ、同じ市民が自分を敬はなかつたと云つては歎き、自分の勝てなかつた敵に對しては負傷と矢弾とを降らせ給へと祈るやうな、そんな氣むづかしい不平だらけの歎願も何もない。主の祈りの中に於ける唯一つの讚美の言葉は、「父よ」といふ言葉だけである、さうしてその讚美こそは愛の誓ひであり證しであるのだ。この父に向つて我等は僅かばかりのパンを求め、更に我等が敵に與へると同じ免しを請ひ、最後に我等が悪と戦ひ、總てのもの、敵に對ふ場合、また我等の天國に入るのを拒む大きな障壁を破る場合に、確實な保護を要求するのである。

「我等の父よ」と云ふ彼は傲慢でもなければまた卑屈でもない。彼は殆んど對等の者が他の對等の者に話すと同じやうに、十分相手を信用して親密に隠やかに父に向つて話しかけるのである。それゆゑ、彼はそれ以上に言葉を費して父にその欲望を告げる必要のないことを承知してゐる。イエスは云ふ、「汝らの父は求めぬ前に、汝らの必要なるものを知りたまふ」と。斯くの如く、すべての中で最も美しい祈りは、我等が神の如くならねばならぬ場合、それに必要なすべての事を毎日心に呼び起すことである。

力ある行爲

神を模倣せよとの新しい律を宣べたのち、イエスは山から降りて來た。

人は何時までも高い所に止まつてゐられるものではない。山の頂上に達した利那、我等は降下の運命に在るものである。登りは一段毎に降りるを誓ひ、再び降りて來ることを約束する。何か言ふ事のある人は、人に聞いて貰はなければ何の役にも立たない。それが始終山の頂きでだけ話すなら、聞き手だつて數が少からう。毫も熱しない人々にとつては、山の頂きは寒い、さうして話し手の聲が大して行き届るまい。與へに來た彼は、肺臓の弱い、心臓の疲れた、脚の痺れた人々に、自分に從いて跋を曳き曳き、高い山へよち登つて來いとは云へない。彼はその人々に從つて平原にまで、彼等の家まで降りて行かなければならぬ。彼等を引揚げようとするには、彼自身その人々の處まで降つて來なければならぬ。

イエスは高所でする高尚な教へが總ての人々に福音を弘めるのに不十分なことを知つてゐた。彼は人々が成るべく抽象的な言葉を省いて、描寫の言葉、物語り風の言葉、事實らしく感じられる言葉を要求してゐることを知つてゐた。しかもそれらの言葉を以てしても猶ほ、彼等の満足しないであらうことをも知つてゐた。

イエスに從つた單純な、田舎者臭い、樸訥な、賤しい人々は、生活の基礎を物質的な事物の上に置いてゐる人々、これに引換へ精神的の事物は、物質的の證明、記號に據るか物質的の象徴に據るかして、大き

な努力を拂はなければ理解の出来なかつた人々である。一旦物質的の形に置き換へて見なければ、彼等の計量の出来るやうな單純な證據がなければ、世間の日常の言葉でも言ひ現せる證據に接しなければ、彼等には心靈的の眞理が判らなかつたのであらう。具體的の例を擧げた寓話は、その訓意の存するところに人の心を惹き付けて行くことが出来る。怪異は彼等にとつて或る新しい眞理を、懸案中の或る使命を確信する證左となる。抽象的な公理や箴言から出来上つた説教は、これらの想像力に富んだ東洋人たちに満足と與へなかつた。イエスは奇事や詩に依頼して、奇蹟を行ひ、また譬へ話で物を言つた。多くの現代人にとつては、四福音書の著者たちが再説してゐる奇蹟が、かへつて彼等をイエスと聖書とから引き離す因である。現代人の忸くれた頭は奇蹟的な事を受け容れることが出来ない。随つて彼等は福音書の偽りを論究する。さうしてそれほど各處に偽りの多いものなら、到底、信じるに足りないといふことになる。イエスは常に死人を起たしめた、それゆゑ彼の言葉に價値がない、などと云ふのは論外である。

かういふ論究の仕方をする人々は間違つてゐる。彼等は奇蹟に對してイエスが與へたそれよりも遙に大きな重さと意味とを與へてゐるのである。もし彼等が四福音書を読んだとしたならば、彼等にはイエスが奇蹟を行ふのに何時も氣の進まなかつたこと、彼がこの彼の神通力に非常な重きを置いてゐなかつたこと、位は判つてゐた筈であらう。イエスは立派に斷りの理由の立つ場合は何時も斷つてゐる。斷り切れないの

は彼の許に泣き付いて来る男女の信仰に報いる場合だけに過ぎない。けれども、四福音書の示すところに據れば、イエスは己れのためや己れを救ふためには決して奇蹟を行つてゐない。彼はサタンと共に荒野に在る時も、ナザレで殺されかけてゐる時にも、ゲツセマネで逮捕される場合にも、または十字架の上に在つて己れを救へと人々から云はれる場合にも、決して奇蹟を行つてはゐない。その力はたゞ他人のためのもの、彼の生きた兄弟たちの利益にのみ使はれるのだ。

天からの徴し、不信の者にイエスの言葉の正しいことを信じさせるための徴し、さうした徴しを求める者が多い。「邪曲にして不義なる代は徴しを求む。されど預言者ヨナの徴しの外に徴しは與へられじ。」この徴しとは何であるか。キリストの復活後に福音書を書いた著者たちは、ヨナが三日目に大魚から立ち現れることは、イエスが三日目に墓から立ち現はれることを意味するものと解した、けれどもイエスの言つてゐる残りの言葉を讀むと、彼の意味の別に存したことが判る。「ニネベの人、審判の時、今の代の人と共に立ちて、之が罪を定めん、彼らはヨナの宣ぶる言によりて悔い改めたり。視よ、ヨナよりも勝るもの此處に在り。」ニネベは奇怪事を求めなかつた、たゞ其の言葉に歸依したのであつた。イエスがヨナの宣べたそれよりも限りなく偉大な眞理を以てしても猶ほ歸依せしめることの出来ぬ人々は、ニネベの人々よりも、偶像崇拜者よりも、野蠻人よりも、標準の低い人々だ。信仰は驚畏にのみ頼るべきものではない

が、それにしても猶ほ信仰が——奇蹟を俟たずに仕遂げられるものこそ、より高尚な一層完全なものではあるけれども——その高い熱度によつて奇蹟を成し遂げ得るといふことに、思ひを回らしてみたい。眞理に對つてその扉を閉ざした剛愎な心は、どんなに偉大な奇蹟を以てしても歸依さすことの出来るものではない。「若しモーセと預言者とに聴かずば、たとひ死人の中より甦へる者ありとも、其の勤めを納れざるべし。」イエスは最も大がりの修驗の行はれた町々で輕蔑され排斥された。「禍ひなるかな、コラジンよ、禍ひなるかな、ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる能力ある業を、ツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布をき、灰の中に座して、悔い改めしならん。」

イエスは決して奇蹟を以て彼れ獨自の特權であると主張したことがない。他人がイエスの許に彼の名に於て悪魔を逐ひ出しつゝある者のあることを告げに來ても、彼は「止むな」と答へた。此の能力は弟子たちにも禁じられてなかつた。「病める者を癒やし、死にたる者を甦へらせ、癩病人を潔め、悪魔を逐ひ出せ。價なしに受けたれば價なしに與へよ。」

たとひ法螺吹きほうらふきの魔術使まじゆつしひらでさへが、昔は奇蹟と思はれるやうな不思議を行ひ得たであらう。イエスの時代に於ては、シモン某シモン 某といふ者がサマリヤで奇蹟を行つてゐた。またパリサイ人の弟子たちでさへ奇蹟を行つた。けれども奇蹟だけで神の國に入ることは出来ない。「その日、多くの者われに對ひて、主

よ、主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐ひ出し、汝の名によりて多くの能力ある業を爲しにあらすやと言はん。その時、われ明はに告げん、われ絶えて汝ら知らず、不法をなす者よ、我を離れ去れと。悪鬼を逐ひ出すだけでは十分でない、先づ己れの裡なる悪鬼、矜持けいぢと貪慾どんよくとの悪鬼を逐ひ出さなければならぬのである。

またイエスの死後にも、奇蹟を行ふ者が現はれることであらう。「それは眞キリスト預言者おこりて、大いなる徴と不思議とを現はし、爲し得べくば、選民をも惑はさんとすべければなり。」予はこれまで汝らを警戒して來たのだ。汝らが「人の子」を見る迄は、これらの徴やこれらの不思議を信するな。預言者の奇蹟は彼等の言の眞理であることを證明するものではないのだ。

總てこれらの理由から、イエスはその都度出来るだけ奇蹟を行ふことを避けたが、悲しみ悩む者の歎願を何時も拒絶してばかりゐるわけには行かなかつたのであらう、時には彼の憐れみが要求を待たずに果されることも屢々あつた。何故なら奇蹟は信仰の屬性であり、彼の信仰が限りなく、且つまた信者のそれが甚大なためである。けれども醫しの終へるや否や、イエスは屢々彼の癒やした者に秘密を守るやうに命じた。「慎みて誰れにも語るな。たとひ汝に。」奇蹟に煩はされることを恐れてキリストの眞理に耳を傾けない人々は、トマスに向けて宣べられた意味深い言葉を想ひ起すべきである。即ち「見ずして信する者は幸福

なり。」

盲人、見る

人間はパンと健康と希望と、この三つのものなしには生き得ない。それ以外はあらゆるものを奪はれても——猛り狂ひ呻き呪ひながらでも——生きて行くことが出来る。けれども少くとも此の三つのもの、ない以上、人間は早く死を招くやうになる。何故なら其等のもの、ない人生は死に等しいからだ。それは苦しみの加はつた死、知覚の脱失すらも伴はない、重態、苦惱、悪性の死である。飢ゑは人體を衰弱さす、苦痛は肉體に嫌悪を感じしめる。失望は——物事により良き期待を懸けず、安心も慰藉も持たぬこと——一切のものを味氣なくし、あらゆる存在の理由、あらゆる行動の理由を奪ひ去つてしまふ。自殺が一つの動作であるばかりに、自分を殺さずにいる人たちがをるのだ。

人間は自分に惹き寄せようと思ふ者は、彼等にパンと健康と希望とを與へなければならぬ。彼等を養ひ、彼等を癒やし、彼等により美しい生活に就いての信仰を與へなければならぬ。

イエスは此の信仰を與へる。荒野や山上で彼に従つた者に、彼は物質的、精神的のパンを配つた。彼は

石をパンに變へることを好まなかつたけれども、本統のパンを千人分にも餘るほど作つた。さうして人々がその胸中に懐く石塊を愛する心に變へた。

彼はまた病人を斥けなかつた。イエスは自己を苦しめる者でもなければ自己を鞭撻する者でもない。彼は惡に打克つために苦しみが必要だとは信じてゐない。惡は惡だ、逐ひ出されなければならぬものだ、しかし苦しみもまた惡なのだ。魂の悩みだけで己に救ひを求めぬのに十分であるものを、今更何の必要があつて肉體まで苦しめようとするのか？ 古代のユダヤ人は病氣を刑罰と考へた、キリスト者はそれを何よりも魂を入れ替へるための助けと信じてゐる。

然しながら、イエスは罪のない者の受ける應報を信じない、従つて眞の救ひが體に腫物を出来したり禁慾主義者のやうに毛のシャツを着ることによつて麻痺得らるゝものとは豫期しない。肉體のものは肉體に返し、魂のものは魂に返すべきである。彼は人と親しく食事を共にすることを好む、良い古葡萄酒も敢へて辭退しない、婦人たちが彼の頭と足とに香料を注いで呉れるのも拒みはしない。イエスは幾日でも斷食が出来る、一片のパンと煮魚の片身で満足してゐることが出来る、石に枕して地面に寝ることも出来る、けれども彼はよくよく避け難い場合でもなければ、殊更進んで缺乏や飢ゑや苦しみを求めはしないのだ。健康は彼にとつて良いものと見做されてゐる、同様に友誼と食事を共にすることの清い楽しみも然う

だ。良い團樂の中で飲む一杯の葡萄酒、ナルドの油壺の匂ひも、若しかうしたものが他人に苦しみを與へさへしなければ、彼はそれらを良いもの、享け容るべきものとしてゐる。

病人に出遣へば癒してやる。イエスは生活を否定するために来たのではない、それを肯定して一層幸福な一層完全な生活を建設しようがために現れたのだ。彼は故意に病人を探し出さうとはしない。彼の使命は魂の惱みを逐ひ出し、魂の歡びを持ち來すことに在るのだ。けれどもそれが偶々彼にとつて、肉體の苦しみを逐ひ出すこと、苦痛を鎮めることが、魂の健康と併ひ合せて肉體の健康をも恢復することである場合、彼はそれをなすことを拒み得ないのである。彼は大抵の場合それと反對の態度を示してゐる。それといふのは彼の目的が一層高いところに在るからだ。彼としては恐らく人々の眼に旅廻りの奇術師の如く見られたり若しくは大多数の人々が期待してゐた俗世間的のメシヤの如く見られることを欲しなかつたのであらう。然しながら、彼は悪を征服しようといふ欲求があり、また人々が彼に總ての悪を征服し得る能力のあることを知つてゐるがために、彼の愛は餘儀なく肉體の悪をも逐ひ出すことになるのだ。

健康な人間の歩いた道路を彼の方に向つて、癩病人の群れ、人に嫌はれる、容貌の潰れた、怖ろしい病人たちがやつて來る時、あの鉛色に腫れ上つて、ぼろぼろの着物から透いて見える垢だらけの皮膚、あの痲や斑點や痔だらけの皮膚、口元を引釣らせ、眼を半潰れにし、手頭を眼れ上らす、萎縮んだ皮膚が

彼の眼に留る時、あらゆる人間に爪弾きされ、あらゆる人間に棄避され、あらゆる人間に忌み嫌はれながら、しかも僅かなパンや一皿の水にありつき、古い荒屋の軒下に身を隠すことが出來さへすれば、たゞもろそれだけで無精に有り難がつてゐる憐れな惱める亡霊たち、その彼等が腫れ潰れた唇から苦しさに言葉を發して、かねて言葉と行爲とに權威ありと知るイエスに頼る時、健康のため治療のため奇蹟のためには彼等の失望の中に於ける唯一の希望であるイエスに頼る時、彼はどうして他の人々がしたやうに、彼等を指彈し、彼等の祈りを聞かぬ振りすることが出來たであらう？

また、激しい痙攣に顔を歪め、唇に泡を吹きながら塵の中に跳く癩癩やみ、悪鬼に憑かれて荒れ果てた墓場の中を叫び廻る人々、見棄てられた夜の兎犬にも等しい彼等、胴體は未だに十分苦しみを感したが、その中に住む魂が幽閉の悲鳴を擧げてゐる、屍體も同様の中風患者、また生れながらにして夜の世界に閉ぢ籠められる盲者、自由に道行く幸福な人々の中で躓きながら、早くも墜穴の暗黒を経験する悲惨な盲者、光りが宛かも無限に奥深い所から漸く彼等に達するかのやうに、その頭を高く差し伸べその眼を見張つて歩く、怖氣のついた盲者、彼等のためには此の世の中が多少ともさらさらの地面の連なりに過ぎなくて、その中を手塚で歩いてゐる盲者、永遠に孤獨で、しかも太陽の存在をその體に受ける温度と熱だけで知る盲者たち！ イエスは此等の不幸な者に對して、どうして「否な」と答へ得たであらう？

ヨハネへの答へ

イエスは病人を癒しても決して魔術使ひや祈禱者のやうな真似はしない。呪文や呪符も使はなければ、また燻香、面纱、秘傳なども用ひない。天國や地獄の權力に助けを求めることもしない。彼にとつては強し一と聲、優しい一と言、愛撫の一と口、たゞ一語で事が足りる。彼の意志と、歎願者の信仰とさへあれば、それで十分なのだ。總ての人々に向ひ、彼は先づ「我この事をなし得ると信するか」との質問を發し、治療の終へたのち、「行け、汝の信仰なんぢを救へり」と云ふ。イエスに取つては、奇蹟とは二つの意志が善のために結合することであり、また癒やす者の信仰と癒された者の信仰との生ける契約である。「誠に汝らに告ぐ、もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に此處より彼處に移れと言ふとも移らん。斯くて汝ら能はぬことなかるべし。もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この桑の樹に抜けて海に植はれと言ふとも汝らに従ふべし。信仰のない者、芥種一粒の千分の一ほどの信仰すらもない者は、誰にもそんな權力がないと言ひ張り、その故にイエスが詐欺師であると誓ふ。

四福音書の中で奇蹟は三つ變つた稱呼を持つてゐる。「ドウナメイス」——能力、「テラク」——不思議

「セメイス」——徴と此の三つである。奇蹟はメシヤの預言を想ひ出す人々にとつては徴であり、キリストがメシヤであるといふ證據を待ち望む人々にとつては不思議である、けれどもイエスにとつて又イエスに在つては、「ドウナメイス」、即ち大いなる業、超人的の能力から發する勝利の電光があるだけのことだ。イエスの治療には凡そ二重の意味がある、肉體の治療を意味するだけでなく精神の治療をも意味することだ、就中、イエスがその意を須ひつゝあるは、魂の病を癒やして天國をまた地上にも建設しようとする志しである。

大抵の病氣は精神的また肉體的に二重になつてゐる、それがまた不思議なほど精確に隱喻や寓意の役に立つ。イエスは不具者、跛者、熱病人、水腫を患ふ男、血の止まらぬ女等を癒やした。彼はまた刀傷をも癒やした——ゲツセマネの夜、ペテロに切り落されたマルコの耳がそれだ——これは要するに彼の律……「汝らを善ふ者にも善くせよ」を……最後まで守るためであつた。けれどもイエスはより以上悪々、悪鬼に憑かれた者たちや、中風病み、癩病患者、盲者、聾啞者等を癒やした。昔は精神病者のことを悪鬼に憑かれると云つたものだ、教授アリストテレスでさへ此の悪鬼に憑かれることを信じた。精神錯亂者、癲癇やみ、ヒステリー患者等を、人々は悪魔に蝕されたものとした。それに對しては現代人の駁論、否寧ろ單に口頭ばかりの説明が何等その甲斐なく、悪鬼に魅せられるといふことは、矢張多くの場合、字義通りさう

「たものであると信じられてゐる。この一般的に知れ亘つた説明が、イエスの好んで用ひた寓意的、比喩的の教訓に非常に役立つた。彼は神の國を建設して、サタンの國を排除しようとした。悪魔を逐ひ出すことが彼の一方の使命であつた。それが肉體上の不快であらうと、また實際悪魔に責め苛まれる苦しみであらうと、その別は敢へて問ふところではない、肉體的の虚弱と精神的の虚弱との間には、實際上の類似に基づいた術語が並行してゐる。狂人と、癲癩と、中風と、癡呆性と、賤民と、癩病患者と、盲者と、眞理を見ることの出来ない人々、聾者と眞理を聞かうとしない人々と、癒やされた者と、廻つた者と、以上の間には各々類似がある。」

牢獄に押込められたヨハネが、イエスの許に二人の弟子を遣はして、彼が抑も期待された預言者であるか、それとも彼等は又別の預言者を待つべきであるかを問はしめた時、イエスは彼等に答へて「往きて汝らが見聞せし所をヨハネに告げよ、盲人は見、跛者は歩み、癩病人は潔められ、聾者は聞き、死人は甦らせられ、貧しき者は福音を聞かせらる」と言つた。イエスは福音と奇蹟的の治療とを引離さなかつた。それらは同じ行爲だ、さういふ答へへの意味は、魂の傾きが福音を享け容れるのにより良い状態に置かれるやうに、先づ肉體から醫やして懸つたと云ふことに在るのだ。

陽の光りを見なかつた人々も、今度は眞理の光を見ることが出来、人間の言葉さへ聞えなかつた人々も

今度は神の言葉が聞けるやうになる。悪魔に囚はれた人々は悪魔から放たれ、垢じみて腐爛した人々が小兒のやうに潔められ、動けなかつた人、氣力がなくて縮込んでゐた人々も、最早予の足跡を踏んで歩み出す。魂の生活に於て死んでゐた人々も、予の一語によつて死から甦る……またその福音に従へば、從來の貧者は現在の富者よりも裕福なものになる。これらが予の信任状、予の正統を證す證明書である。

醫す人、解放者としてのイエスは、現今彼に敵意を持つ者が不心得にも禁慾主義を防止して、もう一度彼等の享樂的な異教徒風の信仰を庇ふ意から奮然としたがつてゐるやうな人物ではない。彼等は云ふ「彼は病める者、弱き者、汚れたる者、兇き者、力なき者、婢僕たちの神である」と。けれどもキリストの爲すことは總て、健康を、力を、清潔を、富を、自由を與へることだ。彼が人に近づくのは病める者に向つては明白に彼等の病氣を逐ひ拂ふためであり、弱き者に向つては彼等をその弱さから引き起すためであり、汚れたる者に向つては彼等を潔めるためであり、奴隷に向つては彼等を解放するためなのだ。病めるが故にのみ彼は病人を愛すわけではない、彼は古代人の愛したやうに健康を愛してゐる、さうして其の愛が大きいばかりに、彼は健康を失つた人々にそれを取戻してやらうと欲するのだ。イエスは生命を約束するもの、しかも其の生命が今より一層生き甲斐のあるところのそれ、幸福の預言者である。奇蹟はその約束の誓ひに過ぎない。

「死にし者、甦るべし！」これは獄中の洗禮者ヨハネを満足さすべき靈の一つである。善良な妹に、よく働くマルタに、イエスは言つた。「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は永遠に死なざるべし」と。復活は信仰における再生であり、不滅はこの信仰を永久に確認することである。

四福音書の著者たちは三つの復活を知つてゐる。それらの史實は嚴かに物語られてあるけれども、その實證をよく明確に言ひ表してゐる。イエスは三人の死者を甦らしめた、若者と娘と友人とであつた。

ナザレを去ること數マイル、小さな丘の上に建つた「美しい」ナインの町に入らうとしてゐた時、イエスは或る葬式の行列に會つた。それは或る寡婦が若い息子を葬りに行くのであつた。寡婦は暫らく前に良人を喪くしたばかりで、彼女に残されたものはたゞ此の息子だけ、しかも此度は其の息子がまた喪くなつて今それを葬りに行くところなのだ。イエスは其の母が母としての如何にも當惑、顛倒したらしい悲しみに女達の間に交つて泣きながら歩いて行くのを見て、その心を深く動かされずには居なかつた。彼女はこ

世の中に彼女を愛する唯一二人の人間を持つてゐたのだが、その中の初めの一人は死んでしまひ、今また次の一人が死んだのである。次から次へ、兩人とも喪くなつてしまつたのだ。取り残されたのは彼女ひとり、而も男氣のない女の獨り身。良人もなければ息子もなく、助けもなければ頼りも慰めもないのだ。若い頃の追憶であつた愛も逝き、晩年の希望であつた愛も逝いてしまつた。これらの貧しい貧り氣の無い愛が、二つとも失はれてしまつたのである。息子が失くなつても良人さへあれば妻は慰められることが出来る、良人が失くなつても息子さへあれば補ひはつく。それが唯だ一人残されたのでは、どうにも仕様がなない！彼女の唇は最早や永久に接吻を繰返すわけに行かなくなつたのだ！

イエスは此の母に憐みを感じた、その悲みは訴へを聴くのと同じ思であつた。「泣くな」と彼は言つた。彼は死人の傍らに進み寄り、その體に手を觸れた。若者は經帷子に包まれた體を眞直ぐに伸ばし、けれど眞蒼な死相に變り果てた顔は覆はずに、其處に横たはつてゐた。柩の昇き手が立ちどまる、一同、口を喊む、母までが驚いて物を言はなかつた。

「若者よ、われ汝に言ふ、起きよ。」其處で死人が起ち上つて物を言ひ始めた。イエスはそれを母に付した。それが最早彼女のものであるが故に「付した」のである。イエスはその若者を死の國から連れ戻つて、彼なしには生きて行けぬ彼女に引渡したのだ、一人の母が泣かずに濟むやうに。

また別の日、ガタラから歸つてくる途中、一人の父がイエスの足許にひれ伏した。彼の獨り娘が死にかけてゐたのだ。その者の名はヤイロと言ひ、會堂司ではあつたが、イエスを信する者であつた。彼等は連立つて歩いて行つた。途半ばにして使ひの者に出會つた。使ひの者は言ふ、「汝の娘は早や死にたり、師を煩はすな」と。けれどもイエスはそれを聞いて、使者に答へて言ふ、「懼るな、たゞ信ぜよ、さらば娘は救はれん」と。さうして其の家に着いたとき、イエスはベテロとヤコブとヨハネと娘の父母の他、誰もその中に入ることを許さなかつた。其處で一同、涙を流して娘のために歎いてゐたが、そのときイエスは言つた、「泣くな、死にたるにあらず、寐ねたるなり」と。けれど人々は娘の死んだことを知つてゐたのでイエスを嘲笑つた。然るにイエスは彼等を一同外へ出し、彼女の手を執りてこれに「娘よ、起きよ」と呼びかけた。と、その魂が立ち還つて来て、娘は忽ち起き上つた。イエスはこれに食事を與へるやうに命じた。彼女は視覺に映る魂、即ち亡靈ではなくて、熱に浮かされて夢を見たのち、新しい日のために仕度を整つて眼を醒ました、やゝ疲れ氣味の生きた體であつた。

醒まされしラザロ

ラザロとイエスとは互に愛した。イエスはベタニヤなるラザロの家にて一度ならず彼およびその姉妹らと食事を共にした。此處に或る日のこと、ラザロが病氣で臥せり、その報せがイエスの許に届いた。これを聞いてイエスは「この病は死に至らず」と答へた。二日過ぎた。が、三日目にイエスは、その弟子たちに向つて言つた。「我等の友ラザロ眠れり、されど我よび起さんために往くなり。」彼のベタニヤに近づいた時、マルタは彼を出迎へて、怨みを述べるかのやうに言つた。

「主よ、もし此處に在し、ならば、わが兄弟は死なざりしものを。」

暫らく經つてマリヤもまた言つた。「主よ、もし此處に在し、ならば、わが兄弟は死なざりしものを。」彼女らの泣き言がイエスの心を悲しませしめた。それは彼の遅れて來たのを懼れたわけではなく、彼の愛する人々すら信を缺くことを慄に哀しんでゐたからである。

「イエス言ひ給ふ、彼を何處に置きしか。彼ら言ふ、主よ、來りて見たまへ……イエスまた心を傷めつ墓に到りたまふ。墓は洞にして石を置きて塞げり。イエス言ひ給ふ、石を除けよ。」

物事にてきはきして几帳面な性格の家婦マルタが説明して言つた。「主よ、彼は早や臭し、四日を経たればなり。」けれどイエスはそれを取合はずに「石を除けよ。」と言つた。石は除けられた。イエスは天を仰いで短く祈りを捧げ、穴に近付いてその友に向ひ聲高に叫んだ。「ラザロよ、出で來れ。」

ラザロは躓きながら出て来た。何故ならその手足を布で巻かれ、顔も手拭で包まれてゐたからである。「これを解きて往かしめよ。」

かくて其の四人は十二の弟子たちと雷鳴に打たれたユダヤ人の群集とを引連れて家に歸つた。ラザロの眼は再び光に慣れてきた。まだ痛みが去り切らないけれども、とに角自分で起つて歩き手も使つてみた。マルタは、四日間も取亂した哀しみの中に在つて家の中がいろいろ散らかり放題になつてゐた中を小氣味よく働いて、出来るだけ立派な御馳走を整へた。——其處で其の死から生に還つた人は、その姉妹、友達らと一緒に食事をした。マリヤは食物が殆ど一口も咽喉に通らなかつた、さうして死の征服者なるイエスから眼を放すことが出来なかつた。イエスは己が眼から涙を拭ひ終つて、パンを割き葡萄酒を飲んだ、此の日も何時もと何ら變りのないものゝやうに。

これらは四福音書の著者たちによつて叙べられた則への話であるが、我々はそれらの話の中から二三の注意すべき事項を引出すことが出来る。しかもそれは我々にとつて難かしい言はゞ不適當の註釋を必要としないところのものである。イエスは其の生涯に於てたゞ三人の人間を死からへ甦らしめた。これは彼の力を人々に示して、彼等の想像力に訴へようとしたものではなく、たゞ死人を愛した人々の哀しみに撲たれたからである、一人の母、一人の父、二人の姉妹を慰めるためだつたのだ。これらの則へのうち一

件は公に行はれた。あとの一件即ちヤイロの娘の場合、極く少數の人の居る處で成し遂げられた、さうしてイエスは其等の人々にその事を何も語るなと命じた。

もう一つの點で最も重要な事は、すべて此等の三つの場合に於て、イエスが死人を死んだものとしてではなく單に眠つた者としてそれに話しかけてゐる事だ。彼はかの寡婦にその息子の容子などを尋ねてゐる暇がなかつた。何故ならその決意があまりに早く付いたからであつた。けれども彼に對してさへイエスは、宛かも寐過ごした子供に物を言ふやうに、「若者よ、われ汝に言ふ、起きよ。」と言つた。人々が彼にヤイロの娘の死んだことを傳へたとき、イエスは「泣くな死にたるにあらず、寢ねたるなり。」と答へた。人々がラザロの計報を確めたときにも、イエスは「死にたるにあらず、眠りしのみ。」と言ひ張つた。彼は死から甦へらすことを求めず、たゞ眠りを醒すことを求めた。死は彼にとつてはたゞ一つの眠り、平生の普通の眠りよりは一層深い眠り、たゞ超人的の愛によつてのみ破らるべき一つの眠りに過ぎなかつた。この愛は死人に對するよりも生き残つた人々に對するそれ、他人の涙を見て涙の落ちる人の愛であつた。

カナの婚禮

イエスは婚禮に行くことを喜んだ。贅澤にも愉快にも滅多にめぐり遭はさない連中、自分の好きなだけ飲み食ひしたことの無い人間にとつては、その人の婚禮の日が彼の全生涯を通じて一番大騒ぎをする日であり、その長い單調な平凡極まる生存中でふんだんに愉快の盡せる立派な通り路である。毎晩宴會つゞきの裕福な人々や、昔の貧乏人なら一週間も保つであらうところの御馳走をたつた一日で食ひ盡してしまふ現代人らは、もはや其の日の嚴肅な歡びを感じない。けれども昔の貧乏人、労働者、田舎者、東洋人などは皆年中、大麥のパンと無花果の乾したのと、僅かばかりの魚と卵とで食つてをり、子羊や仔山羊や山羊のときは祭の日でもなければ殺さなかつたから、彼等はまた食物を節約することには慣れてをり、勘定が細かく、色々なものを切り詰めて、實際必要なものだけで満足して来たから、その代り婚禮といふものを一生涯の中で一番本當の一番大きな饗宴とした。他の祝宴は國民のそれも教會のそれも各人が平等に祝ふところのもので、年に一度は必ず繰返されるが、婚禮はその人自身の祝宴で、しかも一生涯を通じてたつた一度しか回つて来ないものであつた。

そこで、その日を彼等のために忘れがたいものにするために、世の中の一切の歡喜と光彩とが、新郎と新郎との周圍に集められる。炬火は夜、歌唱ひや踊り手や樂手を伴れて、新郎を迎へに行く。家では色々な食物を色々な風に料理して山盛り支度をする。葡萄酒を入れ革囊は壁のところに寄せ掛けてあるし、

香、膏の瓊は友達らのために備へられる。照明、音樂、香料、娛樂、舞踏。感覺を満足さすために何一つ缺けたものがない。その日一日に限つて、平素は王公貴人のみの特權とされてゐるものが、すべて貧乏人の家に雪崩れ込んで行くのだ。

イエスはこの純潔な歡びを喜んだ、さうしてたとひ數時間だけでも、魂の陰慘な音ましい毎日の貧乏生活から浮び上つて、心の高揚を感じる彼等のために、同感を催した。婚禮の祝ひは彼にあつては祭典以上のものに見做された。婚禮は愛を以て、二人の情愛が結合して、二人の相愛する若人が結び付いて、運命を征服するところの、青春時に於ける人間最高の努力である。それは人生に對して二重の信仰をもつこと、即ち人生の永續と安定とを信することだ。結婚する男は人間社會の手に付された人質だ。彼は己れを縛るが如く見せかけて、その實新しい社會の首となり、新しい時代の父となつて、己れ自身を解放するのである。婚禮は幸福を期待することであり、また苦惱を享け容れることだ。それには幻想と良心とがそれぞれ干渉する。未來に向けて堪らなく嬉しい希望をかける悲劇の陰にこそ、何人も忽ちにすることの出来ない、さうかと云つて利己的な理性の光では享け容れることの出来ない、婚禮の雄々しくもまた聖い偉大さがあるのだ。誰か、婚姻を除いて人間のこれほど熱心に處罰を望む場合があるかを見た者があるか。イエスにとつては、婚禮が更に一層深い意味をもつてゐる。それは或る永遠なもの、始まりを意味す

のだ。神の結び付けた者を、人間は別々に分けることが出来ない。心の結合した場合、その結び付いた場合、律も剣も彼等の仲を割くことが出来ない。變り易い、苟且な、移り氣な、儘ならぬ、毀れ易い、この我々の人世に、死ぬまでもまた死んだ後までも、永遠に續けられなければならないものが唯一つだけである。それはこの朽ち易い鎖りの中に在つて唯一つの永遠の繋がりである結婚だ。

イエスは屢々婚禮と饗宴の話をする。その最も美しい譬へ話しの中に、息子の婚禮に招待状を送り出した王の話がある、もう一つは夜分、新郎の友人たちの着くのを待つ女らの話がある、それからまた饗宴を支度した主の話もある。キリストはその弟子たちが飲み食ひする故を以て彼を譏する者に答へる場合、彼れ自身を友達に祝はれた新郎になぞらへてゐる。

彼は葡萄酒を蔑まなかつた、さうして其の十二の弟子たちと共に、彼の血であるところの葡萄酒を飲むとき、彼はいつも天國の新らしい葡萄酒のことを想ふのである。従つてその彼がカナの婚禮に招かれて行つたことに何の不思議もない。その日彼の行つた奇蹟は萬人の知るところである。六つの水甕がイエスによつて葡萄酒に、しかも其の場に出てゐたものよりも更に上等の葡萄酒に變へられた。古い理論家はそれを其の時まで隠されてあつた贈り物で、新郎新婦を祝ふためにイエスが食事の後に取り出して、皆を驚かしたものだといふ。彼等は附加へて云ふ、それにしても猶ほ三石あまりの葡萄酒は、師の雅量を示す美事な贈り物であると。

これら懷疑派の害蟲どもは、譬喩に長じ理窟の好きなヨハネだけが、カナの婚禮に就いて語つてゐることを注意しなかつたのである。それは奇術師が早業をやつたのでなくて、精神の力が物質の上に働きかけて生じた本統の變質であつた、同時にまたそれは、言葉による譬へ話でなくて事實による譬へ話の一つ、實際の行爲によつて語られた譬へ話なのである。

けれども文字に囚はれず此の話の意味を汲む者は、誰れでも葡萄酒に變つた其の水が、福音と共に始まる新時代を表徴することに氣が付く。荒野における宣言と參籠の前までは水で足りた。世界が悲しみにまで取り残されてゐたからである。然るに今は喜びの音づれが來、天國は手近かに在り、幸福も間近い。人々は今將に悲しみから喜びへ、古い律のやもめ暮しから新しい律との婚禮へと移らうとしてゐる。新郎は我等と共に在る。今は悲しむべきでなく熱すべき時だ。最早や斷食の場合でなく、水でなしに葡萄酒を以て歡び祝ふべき時であらう。

饗宴長の新郎に言つた言葉を想ひ出すがい。『凡そ人は先づ良き葡萄酒を出し、酔の廻る頃ほひ劣れるものを出すに、汝は良き葡萄酒を今まで留め置きたり』。斯くの如きが古い慣例、異教徒であつた古代ユダヤ人の慣例であつた。然るにイエスは此の古い代議制の定めた慣例をも覆へす積りであつた。昔の人

人は先づ良い酒を出してから次ぎに劣つたものを出したのだが、は彼良い酒から更に上等の酒を與へてゐる。酸つばい熱れない酒、初めに飲まれた下等な酒などは、いづれも古い律の酒、酸くなつて最早や飲むに耐えない悪酒を表徴してゐる。その質がより良くより強く、心を引立て、血を暖めるキリストの酒は天國の新酒、天と地との婚禮に供へられた酒、後に「神の愚か」と呼ばれるであらうところの神々しい酔を與へる酒なのだ。

ヨハネ傳中最初の奇蹟であるカナの婚禮は、福音傳道中の革命の警諭である。

詛はれし無花果の樹

奇蹟の形で現はされたもう一つの警へ話は、枯れた無花果の樹のそれである。過越の祭に近い或る朝、ベタニヤからエルサレムに歸る途中、イエスは空腹を感じた。一本の無花果の樹に立寄つて見れば、それは葉ばかりであつた。いくら早熟の種類の中からでも、實を求めるとは餘りに早過ぎる季節であつたのだ。それにも關らずイエスは、マタイ傳とマルコ傳によれば、その憐れな樹に腹を立て、それを詛つた。マタイ傳によれば「今より後いつまでも果を結ばざれ」とあり、無花果の樹は立ちどころに枯れた。

マルコ傳によれば「今より後いつまでも、人なんぢの果を食はされ。……彼ら朝早く路を過ぎしに無花果の樹の根より枯れたるを見たり。」とある。

四福音書の著者たちに在つては、詛ひの話から直ぐ折返して、イエスの變度かよく言ふ、力強い信仰には求めて得られぬものがないといふ考へが、引續いて出てゐる。

然るに他の人々は、それを度々イエスの唇に上るところの隱喩による悲歎と解釋してゐる。即ち無花果の樹はイスラエル人を指し、古いユダヤの宗教を指すものである、それが今より後、儀禮や式典の身にならぬ葉ばかりをつけ、その葉が人間を養はずに凋落してしまふであらう。正義に飢ゑ愛に飢ゑたイエスは、その葉の間に人間の營養になる憐愍と神聖との果を探し求めたのである。が彼にはそれらが見付からなかつた。イスラエル人は彼の飢を醫しもしなければ、また彼の望みを満しもしなかつた。今より後、葉こそ多けれ果の一つだに成らぬ其の大木からは、何物も期待さるべきでない。永久に死んでしまつた方がいゝ！ 今後は他の民族が繁植するであらうと。

イエスが奇蹟によつて無花果の樹を詛つたことは、その實明白に、ルカ傳中の果を結ばぬ無花果の樹の譬への註釋に外ならない。「或る人、おのが葡萄園に植ゑありし無花果の樹に來りて果を求むれども得ず、園丁に言ふ、視よ、われ三年きたりて此の無花果の樹に果を求むれども得ず。これを伐り倒せ、何ぞ徒ら

に地を塞ぐか。」

園丁が其の人に答へて言ふ、「主よ、今年も許したまへ、われ其の周りを掘りて肥しせん。その後、果を結ばざりし、もし結ばざれば伐り倒したまへ。」

その樹は初めから刑罰に附せられたものでない、三年、果を結ばなかつた爲めに罰せられたのだ。しかも園丁の調停によつて一年間の猶豫を與へられ、その間悉く大切に丁寧に取扱はれた。それが最後の試験たるべきであつた。さうして幾ら底つても役に立たなければ、その時こそ伐り倒して焚かるべきであつたのだ。

三年の間、イエスはユダヤ人に説教した、然るに今は彼等を見棄て、福音を他の人々に告げようと考へてゐた。けれども彼の働き手の一人で、未だにその民族についてゐた一人の弟子が、憐れみを請ひ、もう一回だけの猶豫を希つた。此處に於いてか我々は、彼の大きな愛を以てしても猶ほ、この偽りの多い濁つた時代を悔い改めさせ得るかどうかを試す段取となる。ところが、ベタニヤからの歸り途に於て、ユダヤ教が試験にかけられてしまひ、キリストは彼の十字架のみを期待しなければならぬことになつたのだ。ユダヤ教の悪い無花果の樹は、當然焚かるべきであつた、さうしてそれ以來、誰一人その季節おくれの凋びた果を食はぬことにならう。

パンと魚

パンの殖えた場合が二度ある。中に含まれた分量の比例こそ違へ、内容は一回とも逐一同じ事である、——即ちその示すところのものが全く本統の精神的な意味であることに於て。

何千といふ貧しい人間がイエスに従つて、どの部落からも遠く離れた荒野の一ヶ處に集つた。三日のあひだ彼等は物を食ははなかつた、彼等はその食事を忘れる程、生命のパン即ちイエスの言葉に餓ゑてゐたのだ。けれども三日目に、イエスは彼等を氣の毒がり——中には女、子供もゐた——弟子たちに命じて、大勢に物を食はすことにした。然しながら其處には僅かのパンと數匹の魚しかなかつた、しかも食はすべき口は何千といふ數であつた。その時イエスは彼等を五人から百十人づゝの組に分ち、地面の藁の上に圓く座らせ、その獲たところの僅かばかりの食物を謝して與へた。然るに總ての人は喰ひ飽きて、食べ残りの屑が幾籃か残つた。

ほんとうのパンが少ければ少い程、眞理のパンが餘計満足するわけだ。古い律は冗漫で、言葉數が多く幾つもの部門に分れてゐる。その書物には幾百といふ戒律が記されてある、その上、學者たちやバリサイ

人たちによつて創設された何千といふ律がある。それはちよつと見には全民族の満足しさうな大きな表に見えるけれども、その實、これらの戒律、これらの條文、信條はすべて、枯葉や鋸屑や伐枝に過ぎない。誰だつてこんな物を食つては生きて行けない。で其の數が多ければ多い程彼等は不満足に思ふのである。正義に飢ゑる謙遜な人々は、かうした數ばかり多くても食へない食物に満足が出来ない。その代り、唯だ一つの言葉でもそれがすべての言葉を要約して、満ち足りた連中に欣ばれる頑迷な信仰を超越するものには、唯だ一つの言葉でも魂を満し、心を和げ、正義に對する飢ゑを醫すものには、群衆は満足することであらう。さうしてまた其處には、その日出席しなかつた人々にも、澤山の食物が出来ることであらう。精神的のパンは自體、奇蹟的のものである。麥から作つた一塊のパンは僅かの人にしか足りない、さうしてそれを食べてしまへば、後へは誰のためにも何も残らない。然るに真理のパン、あの神秘的な喜びのパンは決して盡きない、決して盡きることがないのだ。何千人に呉れてやつても其處には何時もそれだけのものが残つてゐる。何萬人に預けてもそれだけのものが何時もそのまゝ残つてゐる。あらゆる人間が宛かもその荒野における男女のやうに各々その分け前を貰つても、預け與へられれば與へられる程、それだけづゝ餘分に次ぎに来るべき人々の爲めに残つて行くのだ。

また或る日、弟子たちがパンの無いことを見出した時、イエスは彼等を諭して、パリサイ人とサドカ

イ人とのパン種に心せよと言つた。然るに何時も彼を理解することの遅い弟子たちは、互ひに「我等パンを携へざりき。」と語り合つた。イエスはそれと悟つて彼等に言つた、「あゝ、信仰うすき者よ、何ぞパン無きことを語り合ふか。未だ悟らぬか、五つのパンを五千人に分ちて、その餘りを幾籃拾ひ、また七つのパンを四千人に分ちて、その餘りを幾籃拾ひしかを覚えぬか。我が言ひしはパンの事にあらぬを何ぞ悟らざる？ 唯パリサイ人とサドカイ人とのパン種に心せよ。」これは墮落した律に對する隠れた誠めである。彼等はいはゆる十二の選ばれ且つ恵まれた忠實な弟子たちであつたが、それでも猶ほ直ちに會得が出来ない、つまり信仰が足りないのだ。

暴風の夜、舟の中でイエスは再び、彼等に誠めを加へるべく餘儀なくされた。師は漕手の一人の枕に頭を枕して、艫の處に寢入つてゐた。と、忽ち風が立ち、颶風が湖を渡つて来て、波が舟にうち込み、刻一刻、舟が今にも沈みさうになつてきた。弟子たちは驚いてイエスを起し、「師よ、我等の亡ぶるを顧み給はぬか」と言つた。イエスは起きて風をいましめ海に向つて言ふ、「黙せよ、鎮まれ」と。然るに風は止んで大いなる風となつた。其處でイエスは彼等に「何故かく臆するか、信仰なきは何ぞ」と言つた。かくて彼等て非常に懼れて互に言ふ、「こは誰ぞ、風も海も順ふとは！」

シモン・ペテロと云つて、些度も怖いことを知らぬ人がゐる。性質が人類を超越してゐるばかりでなく

信仰が大きく、愛が大きく、意志の力が大きい。およそどんな生物でも無生物でも、これらの三つの偉大な品性には反抗し得るものがない。それらの品性を持つ人は一切の俗事を斥け、時の上に勝利を博す。彼は肉の好む事物を棄てる、その故に肉を救ふことが出来る。彼は物質的の事物を斥ける、その故に物質を支配し得るのだ。あらゆる人間はこの力を分ち持つことが出来る。信仰さへあれば足りる、けれどそれは己れに對するだけの信念であつてはならない。

これより數年前のこと、或る偉大なイタリア人で、軍の場數も數多く踏んだ、墮落はしてゐるが腐敗した共和國を治めるには丁度適任の某將軍が、彼に勝ち軍の味方をするために約束しなから、その時間まで間に合はなかつた軍隊の行方を探すべく、少數の漕ぎ手を乗せた舟で海に、ほんとうの海に乗り出した。やがて風が吹き出し、暴風が舟に押し寄せて來たので、水先案内は港に引返さしてくれと言ひ出した。けれどもカイザルは水先案内の手を取つて、彼に「進め、懼るゝな、カイザル汝と共に在り、カイザルの運命が汝と共に帆走るなり」と言つた。これらの高慢な自尊心の強い言葉が乗組員に勇氣をつけた。彼等は一人残らず、宛かもカイザルの力が多少ともその魂に食ひ入つたかのやうに、海の反抗に打克つべく最善の努力を盡した。然しながら海員の努力もその効なく、舟が殆んど沈みかけたので、彼等は遂に歸航を餘儀なくされた。カイザルの信念は矜持と野心、自己に對する信念だけに過ぎなかつた。キリストの信仰

はすべて愛、父なる神を愛すること、人間を愛することであつた。

この愛を以て彼は、逆風に對ひ間切りつゝある弟子たちの舟に歩み寄ることが出来たのである。牧場の草の上を歩むが如く水の上を歩み得たのである。彼等は闇黒の中にそれを見て化物と思つた、さうして彼は此處に再び「心安かれ、我なり、懼るゝな」と言つて、彼等を安心させなければならなかつた。彼が舟に乗るや否や、風が止んで、數分間にして彼等は岸に着いた、其處で弟子たちは再び驚いた、正直なマルコはそのために「彼等は先のパンの事を悟らず、反つて其の心、鈍くなりしなり」と言つてゐる。

この比較は技巧的のやうに見えるかも知れないが、顯示的ではある。何故ならパン種の奇蹟は他のすべての奇蹟の源であるからだ。詩的な言葉で語、眼に見える不思議を以て顯された一切の譬は、宛かも種々異つた形に作られたパンのやうなものである。従つて眞實彼に従ふ者、少くとも總てを彼に捧げて従ふ者は、精神が人間に最も有用の食物であり、その食物に養はれる人こそ世界の主であるといふ、一つの必要な眞理を悟らなければならぬ。

隠し立てなき、詩人

イエスは初手に見ると隠し立ての多い人のやうに見える。奇蹟に感した人々に向つては、その癒し手の誰であるかを何人にも告ぐるなど命じ、祈りや施しは密に行ふがいと云ひ、弟子が氣が付いて彼のキリストであることを言ひ當てれば、それを繰返して口外すべきでないと言ひ付け、その状を變へた後、三人の目撃者に沈黙を守らしめ、また教へるときには、總ての人々の理解しにくい譬へを用ゐる。しかし、一層突き進んで考へてみれば、ほんとうの事實を考へてみれば、イエスに何ら秘傳的のものもないことは明白なことである。彼には限られた少數の小坊主どもに傳授すべき秘法などいふものは何もないのだ。公の場所で明白に物を言ふ。彼は何時も街々の四つ辻や、湖水の砂濱や、會堂や、群衆の真中で話す。その奇蹟に就いて語ることを禁ずるのは、奇術師や修驗者と混同されまいためであり、善事を密になせと命ずるのは、折角の功績を自惚れに壞させまいためである。彼は己れがエルサレムに入る前、即ち公然救ひ主の位に就く前に、十二の弟子たちの彼をキリストと振れ歩くことを欲しない。またその譬へを以て話すのは、説教よりも説話を好んで聞き、議論よりも物語をよく記憶するところの、單純な人たちに一層よく理解さすためだ。

四福音書の著者たち三人は、イエスの話し方に就いてこの意見と矛盾してゐるやうに思はれることを許べてゐる。イエスが弟子に答へて「汝らは天國の奧義を知るところを許されたれど、他の者らは許されず。

この故に彼らには譬へにて語る、これ彼らは見て見ず、聞きて悟らぬためなり。」と言つてゐるのがそれである。

然しながら、イエスがこれと言つた意味は、かういふことに外ならない。「汝らはよくこれらの奧義を悟る、けれども多くの人は、汝らと同じ耳を持ち、精神を持つてゐながら、それらのことを悟らない。この故に彼らに對しては解り易いやうに譬へを以て話すのだ。——つまり、喩への言葉を以てすれば、その方が却つて耳に入り易くもあり、また耳慣れてもゐることだから。」汝らは子供たちを教へるのに童話を以てし、心の單純な者を教へるのに物語りを以てする、同様に「世の多くの人も、今もつてさういふ單純な子供らしい心持でゐるのが少くない。その悟りの遲さに打克つために予は彼らの性質に適ふ言葉を用ひるのだ。彼らは想像力には長けてゐるが知力には缺けてゐる。然るに譬へは理性の力よりも寧ろ想像力に訴へるものだ。予はそれゆゑ眞理を隠すために譬へを用ひるのでなくて、たゞそれを純正理論の形式に於て認めることの出來にくからう人々のために、よりよく顯はさうとするのが予の目的である。それ故もし彼らが理解しなければ、それは彼らの心の剛愎な罪である、何故なら心の剛愎なことは往々にして魂の眼と耳とを閉ぢるものだからである。

イエスは何ら隠すべき神秘を持ち合せなかつた。總ての人々に——とりわけ最も心の貧しい無知な人々

にまで理解されることが、彼の望みであつた。譬へは彼の教へを俗人の前に隠すために作られたものでなく、その教へを何人にも解るやうに明細に説き示すために作られたものだ。しかもそれが偶々十二の弟子たちの知力を以てしても、猶ほ理解の及ばないのは、これイエスの毫も與り知らない悲しい結果であらねばならぬ。

驚くべき内容を持つた彼の使命が、それに劣りなく驚嘆に値ひする彼の詩的創造力を蔭の方へ投込んで了つた。イエスは未だ會て物を書いた例がない——唯一度砂の上に書いたことはあつたが、風がその手蹟を永久に掻消して了つた——けれども力強い想像力に富んだ人、詩篇やルツの話やヨブ記や雅歌等を書いた人々の中に在つて、彼はあらゆる時代の偉大な詩人の一人であつたに違ひない。その若やぎに満ちた力強い精神、その育つた國の雅致ある一般的な言葉、その讀んで來た、教に於ては少いけれども、あらゆる詩の中で内容の最も豊富な書物——その好んで山野や動物の生活と接觸を保つて來たこと、取り分けその聞きに憚む者に光りを與へようとし、永遠に滅びつゝある人々を救はうとし、最も不幸な人々に最大の幸福をもたらさうとした高潔な、熱情のこもつた憧憬（何故なら眞の詩は、その情火を提灯の灯影から擲むものでなく、星や太陽の光りから捉へるものであり、會祖父らの残した書きものの中に見出さるべきでなく、愛の中に、悲しみの中に、深く感激した魂の中に見出さるべきものだからである）、これらのものが

一緒に結び付いてイエスを詩人にし、彼をして生きて來た永遠の幻影を創らしめた。彼はそれによつて或る奇蹟を成し遂げたのであるが、四福音書の著者たちはそれに就いて何の註釋をも施してゐない——その奇蹟とは即ち最高の眞理を斯くも單純な、親みのある、美しい話によつて傳へたことで、その結果これらの話が廿世紀の後までも全一的な永遠の若さを以て輝いてゐるのだ。これらの話の中の或るものは、彼が他の場合に於て抽象的な言葉で説明したところの默示を更に田園詩風もしくは叙事詩風に語り直したに過ぎない。けれども中にはまた彼の教への中で他のどんな形を以てしても未だ會て言ひ現はされたことのないものも幾らかはある。譬へは山上の垂訓に創造力を加へて出來上つた註釋だ、斯くの如きはこれまで世に生れ出た他のどの詩人よりも眞に詩聖の名に値ひする詩人のみが作り得るところのものであらう。

バビニーの「キリスト傳」と

その作意に關する作者の言

岡 田 哲 蔵

イタリーの文豪ジオヴァンニ・バビニーの著「キリスト傳」が現に世界的に認められつゝありといふ。現代に於てバビニーは我等に對して「この人を見よ」Eoq̄e Homo と呼はりつゝありといはる。

英國譯は伊國人らしき名のアクネツタイ (Mary Richard Agnetti) 米國譯はフイツシヤー (Dorothy Canfield Fisher) とて何れも婦人によりて成され、共に一九三三年三月頃世に出で多數の讀者を得たとす。書名は前者は The Story of Christ 後者は Life of Christ となつて居る。

「これは我が讀めるうち最も偉大なキリスト傳、その頁を閱すとき、夢が現になれるかとあやしむ」「半の戸を開きイエスを世に出すものは此の如き書」「伊國のための書たるのみならず全西洋教化のための書」「天才の勝利たると共に禮拜の行爲たる一大成績」などと米國で評され、英國では「覺と熱と該博な知識とを以て詩人に描かれしもの」「小兒の如き單純と未知の清新を以て福音の物語に近づき、新なる發見の喜

びを以て語るもの」などといはれ、また著者が嘗ては不信の雲に迷ひしも後に信の道に入り、キリストの性格と教訓とに生きたるまた透徹せる見解を下せるものなりとし、彼が信仰の勝利の表現なりといはれて居る。

然し我々は評者の言よりも著者自らがその作について何を語るかを聞くに若かぬ、それには第三原稿の自序に創作の動機が明示してあるのを見るをよしとする。

序文の大意は左の如くである。

過去五十年、自由思想家と自稱する人々は再度イエスを殺すことを努めた、即ち人の心より彼を抹殺するのである。哲學者、教授、言語學者などが擧つて十字架に反抗する十字軍を興し、或ひは福音の物語を虚傳とし、イエスは豫言者、魔術者、煽動者の合成に過ぎずとし、またアウグストス及びティベリアス皇帝時代に成れる神話の人物なりとし、またインドやギリシヤなどの思想の折衷者、熱狂の人道主義者などとして之を排し去らんと試みた。

かくして彼を葬るために地は益々深く掘られた、然るに遂に彼を埋め終ることは出来なかつた。

彼の宗教に代る爲に眞理、精神、プロレタリア、英雄、人道、祖國、帝國、理性、美、自然、平和、苦難、慈悲、自我、未來などをそれぞれ本領とする諸般の宗教が前世紀間に試みられた。此等のあるものは

キリスト教の精神を除いて形骸を保ち、或ひは哲學、或ひは政治の諸説を神秘主義に轉化せんとするに過ぎず、概ね冷なる抽象か、熱誠の消滅であつた。その他フリー・メイソンやスピリチュアリストやセオソフィストやオカルティストやまた佛教折衷者の如き何れも少數の信徒を集めたのみで止んだ、最後の反キリスト者は終ひに狂となれるニイチエであつた。

然し如何に多くの時間と知巧とを費してもキリストは地上より除き得なかつた。人間の歴史は彼によりて兩斷され、キリスト前、キリスト後となつて居る。前者は如何に善美なりしものも今は死して居る、後者は尙ほ生きて居る、反キリスト者の存するも俱以て生命のある證となるのみである。全く死せるものならば反抗もあり得ぬからである。然し時代は新たなのであるから、我々はキリストの福音を新たに書かねばならぬ。

一方には現代ほどキリストより離反せる時代は無いが、まは一方には現代ほどキリストを要する時代は無いといふべきである。然し再び彼を見出さんためには古き書は用を爲さぬ。

もとより福音書は完美にして加ふところが無い、然し今日之を讀む人は少い。之に對する言語學者や誤解者の夥しき勞苦も常人には益が少い。

時代毎にキリストを生かすには、新たなる言を以て時代の要求に應ずる如く彼を寫さねばならぬ。現代

にはかゝる目的の書も固より少くないが概ね忽ち出で忽ち忘れられて居る。

キリストの諸歴史の歴史を書かんとせば巨冊を要する程に著作は多いが、大別すれば、教會の人が信者のためにものせるものと、學者が常人のために著はせるものと二種となる。然るにその何れも傳記に生命を求むるものを満足せしめぬ。

第一の信者の爲の書はその古臭さで我々は耐えがたい。殘燭や消えた香や油の氣が充ちて呼吸を苦しくする、他の大人物の傳記に感激した人々は特にかゝるものに耐え得ぬ。凡てが補布綴布で、もし偶々美文などを著者が弄ぶところがあると尙ほさらたまらない。それがスコラ學派風の煩瑣な議論か、日曜の説教かといふ風なので、常人が面を背けるのは無理もない。

第二の學者の著述もイエスを示さざること前者よりも甚しい。元來かゝる著者が先づ眞の生けるキリストに就かねばならぬ人物なのである。然るに彼等は歴史的、批評的、科學的ならんとして、文書の本文や外部の事實などにのみ重きを置き、眞價と光を忘れる。神よりは人を求め、奇蹟よりは常理を求め、考證を主とするために疑惑や假説が縦横に入り込み、矛盾が夥しくなり、遂ひには單純なるキリストの傳を細かに刻み盡してしまふ。要するにイエスなるものは世に存せざりしとせるか、よし存したりとするも我々は彼に就いて何等確實に知るところなしといふに歸する。

かくて前者は迷へる者をイエスに來らすことを得ず、後者は異論紛々の迷路に人を投ずるの外はない。著者はかく評し來り、特に文學的價値の缺乏は兩者共通なりとし、今日尙ほ常人の讀書を有するものは佛人ルナンが一八六三年に著せる「イエス傳」位に過ぎずといふ、そのルナンの書は一面キリスト教者を怒らせ、他面史家を憤らしめるが、如何にしてもよく書いてあるために尙ほ人に讀まれるのであるといふ。著者は尙ほいふ——。

もとより多く讀まるといふことが書籍の唯一の徳ではないが、唯だ研究物でなくて人の心に訴ふるものならば讀まれねば効がなす。

著者は故に現在幾千のキリストに關する書あれど、獨斷的ならぬ、また細密な學究的ならぬ、魂の養ひとなり、現代萬人の要求を充すべき書を別に要すといふ。

即ちキリストを今尙ほ存し、愛に生き、現代人に直感し得らるべきものとし、その永遠なるが故に實在する現在の偉大を、未だその面に接せざるがために彼を愛すべきことを知らざる人々に示すべき書を必要とする。そのうちには彼の單純ながら不明なる教義の幾何が超自然的なるかまた象徴的なるか、その人道の幾何が彼の史上の生活とその最後から光を發つか、その教訓のみならず、ベツレヘムの馬槽に生れベツレヘムの雲に入るまでの事蹟から、現代人は何を學ぶべきかを示さねばならぬ。

それは宗教を職とせざるもの手に成り、並二種の書の弊を脱却し、特に文藝を重んじそれを解し、反對者の注意をも牽引するの力あるものから出で來らねばならぬ。

以上は著者の序文の前半であつて現代のイエス傳としては如何なるものが必要なるかを述べたので、從つて彼自らの著作の理想及び動機はこの中に明かである。序文の後半はその著の成れる次第を述べて居るのであるが、こゝには更にその大要を摘んで見やう。

この著は科學的な歴史でない、著者は遠隔の地に退き考證などを離れて書いた、若しこれによつて假令一人でもキリストを再び發見する人あらば満足である。

根據は全く四福音書においた。キリストの傳は福音書以外のことは凡て暗黒と沈黙である。福音書のうちにおいて確實と蓋然と、歴史と傳説と、根底的なものと後に加へたると、原始的なものと獨斷的なものと、それらを辨別する事は不可能である。たゞ新約歴史學者の一般に一致するところは福音書が最も古くして最も信すべき記録であるといふに存す。但しこの外にロギア（語録）アグラファ（口傳）アボクリファ（外典）などに據り、現代の書も約十部を參考とした。

新しき見方と自ら思ふ點も或ひは既に他人が之を説けるやも知れぬ、すべて歴史批評を避け、神學の神祕にも陥らず、ガリラヤの漁夫の如き無邪氣な心でキリストに近づかんとした。

概して黙示とカトリック教の教義に忠ならんとしたが、その表現の方法は新たにした。激烈で粗暴な文體と思はるゝかもしれぬが、著者はそれでなくては現代人を動かし得ると思はぬ。キリストを前代の人と比するときヘブライの代のみならず凡ての異教の代を参照した、事件の配列は必ずしも時間の順序によらず、相似たるものを一所に纏めたこともある。引照や註記など煩はしければ凡て省いた、すべて學究的でない。註釋的となることは特に避けた。母の MARIA に關することは別に一冊を成すつもりで此の篇中には概ね除いた。

次に著者は Edificare といふことを考へて居る。器械的な宗教性を動かすのでなくて精神を再建するのを目的として、建築のことを思ひ、それと書籍とを比觀して居る、要するに藝術の創作のことである。さりとて唯美を目的とする藝術でない、詩的傾向は十分に示される。詩的想像の要を説いて星、家畜小屋、馬槽、山、烟、煙、驢馬、鳩などを常に視るもよろしく聖書の事蹟を想像すべしといふ。また雄辯といふことに觸れて、著者は大なる雄辯の力を有ちたかりしといふ、たゞし書き終つて見れば藝術性の過多なりしを思ひまた新たに書きたくもあるといふ。

説教的なることに關しては、今日の教會は殆ど女子や老人の外行くものが少くなつたから、教會に行かぬ教外の人に説く要ありて、そのための書であるともいふ。原著六〇〇頁以上は長きに失すと思はるべき

も、それでも人に讀まるゝ自信ありと著者はいふ。

終りに著者の過去六年の経験として、會ては神とならんとせし人の傳を書きしが今はその價として人となれる神を描くのであるとて、不信よりキリストに歸れる心狀を示し、それは倦怠のためでもなく、年とりての恐怖のためでもなく、もとより名譽や利益のためでもなく、一旦キリストに歸つて見れば、現代に於て如何に彼が人に裏切られあるか、尙ほよからぬことは如何に忘れられつゝあるかに心づく、然もそれは彼の弟子たるものより裏切られまた忘れつゝあるのである。

然しキリストの教へは古いものでない、その實現は新たな力である。戦ひの後に平和を求むる今に於て特にさうである。

最後に著者はフロレンス人として己が市とキリストの史上の關係に言及して居る、四百年前にフロレンスがキリストを王としたといふ古事であつて、その市民たる著者は今尙ほキリストの臣下であつてまた兵士であることを誇りとするといふ。

.....

以上著者の自言によつて著作の目的と動機を大概明かにしたのであるが、その趣旨が果してよく實現さ

れしや否やは本文を見て知るべきである。

本文はキリスト降誕の馬小屋より起り、昇天の雲にいたるまで九十三章より成り、終りに「キリストへの祈り」なる一章を加ふ。量に於ても大作でその内容の一面をもこゝに述べがたい。然し實に於ては著者の自叙の如き目的に適するものと思はれる。要するに藝術的作物であつて、各章はそれぞれ殆ど散文の詩である。南歐人らしき豊富なる想像と熱情に充ち、時には誇張と思はるゝまでに雄辯が迸る。傑作と認むべきは無論である。

然し學究の書でないといふも現代史的評家の諸説の概ね一致するところは捨つべきで無いから、著者はそれを採つてあることならんと思はるゝが、それは引照も何も無いので、新約専門の學者でもないと思はれ難いであらう。

カトリックの信仰に返つたとして處女降誕をはじめ奇跡をそのまゝに記してあるのは、かゝる信仰が史上に於て人の心に生れ、そこに存在性を發見したといふのであれば異論は無いが、若しそれを事蹟として認むといふなら現代人は承認は出来ぬ、然し精神上の存在であつて、それが藝術となるために、それを詩的に見たといふのなら藝術の作たるを目的とする本書に於て之を難すべきで無い。實際かゝる奇跡を排除したらキリストの傳は零碎とならざるを得ず、イエスをキリストとしたること既に信仰の奇跡的創作たる

上は、それに隣伴する彼の奇跡的生涯が藝術となるは當然である、中世以來多くの宗教畫はかくして成つた。いま著者は新たなる完教畫を描いたのである。

終りの「キリストへの祈り」の一章には著者の現代觀が示されてある。そのうちに四年に亘れる世界大戰に言及し、地と富とを貪りたる商賈主義、拜金宗、剛愎無恥の人心の如何に咀ふべきかを示し、世を擧げて權力を代表するウオータンと、富を代表するマムモンと、肉慾を代表するブリアプスの三位一體を崇拜せる結果の如何に憐れべきかを力説し、人類は福音を捨て、荒廢と死を求めたりといふ。

「されど我等尙ほキリストを待つ、我等價なけれど、また不可能と思はるれど、尙ほ日々汝を望む、荒廢されたる我等の心にも尙ほ残る凡ての愛は、十字架につけられ、我等のために苦しみ、しかも今尙ほ汝の鐵の得ぬ愛を以て我等を苦しむる汝に向ふ。」

この祈りを以て巻を終る。

.....

この意義深き書が今や柴田勝衛君によつて邦譯となつたとき、喜ばしき音信である。原著と歐米の譯書が西洋の多くの讀者の靈の糧となる如く、邦譯の書は邦人にもしかあれかしと祈る。

版權所有



きりすと傳

定價貳圓

譯者 柴田勝衛

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
福永文之助

印刷者 東京市芝區南佐久間町一丁目三番地
和田操

製本者 東京市京橋區南紺屋町四番地
福神和三

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警 醒 社 書 店
振替 東京 五五三番
電話 銀座 二五八七番

四
四
豫

告
四
四

柴田勝衛譯
パピニー著

續きりすと傳

發
行
四
月
上
旬

警
醒
社
書
店

104
740

終